レジリエンス思考の幅と深み

総合生存学館 2 年生
安永温子

1 年間レジリエンスに基づく事前復興のためのガバナンス枠組みと実践モデル -複合災害に焦点を当てたシステムズアプローチ-に参加して学んだことを、大きく 2 つに分けて記す。

1 つ目は、社会を構成する様々な立場の人々が、それぞれの知識や経験を活かしながら協働することの困難さと重要性についてである。困難な点として挙げられることは、それぞれの立場の意見が独立、完結している場合、異なる立場の意見を聞き入れて行動に移すことができなくなってしまうというものである。本プロジェクトでは、防災・減災をトピックとしてあらゆるワークショップが進められてきた。その中で、研究者・政治家・施設運営者・地域住民等の立場からそれぞれお話を聴く機会があった。それぞれの主張はひとつひとつ理解できるものであっても、それらをつなぎ合わせて災害という状況にどのように立ち向かえば良いのか、という具体的な対策に落とし込むことが、自分だけの思考では到底できないと感じた。これは、例えば「災害が起こって今の地域住民は〇〇を必要としている。でも行政がすばやく動いてくれない。」というように、自らの立場の思考のみで他者を判断し、それで話が終わってしまうという現象に類似していると思った。何かを解決しようとするとき、災害に限らずとも、自分が所属する 1 つの立場の考えや伝統、慣習のみに固執してしまうと、別の立場の人々との対話が成立しない現象はよくみられる。だからこそ様々な人と対話を試みることが重要と感じた。一方、それを実際に行うことが想像よりはるかに難しいということも実感した。各々の利害や意図が渦巻く中で、それらの状況を整理し、通訳するような役割も必要だと感じた。それがどのような立場の人であるという解は、自分の中ではまだ存在しない。状況、文脈、解釈によっても異なると思うからである。これは自分で整理することができずにいるため、これからも様々な人と議論しながら考え続けたい点である。

2 つ目は、人が絶望と希望のバランスをとりながら生きることができる点についてである。本プロジェクトの一環で、東日本大震災で多くの犠牲者が出た大川小学校を訪問した。その際、ご遺族の方からお話を伺うことが叶った。その中に、「家族を失ったことはこの上なく悲しい。それでもこの経験を未来につなげるために、伝え続けるし、考え続ける。」というものがあった。想像を絶する痛みや苦しみを味わったことも肯定する。そのうえで将来どこかで起こる可能性がある災害に向けて、希望を持ってそこから目を背けない。という姿勢を学んだ。もちろん誰にでもできることではないと思うし、絶望だけしか見えないようなことも起こると思う。その時は無理に希望を探すのではなく、ある程度絶望に流されることも自分に許しながら、生きていくことができればそれもまた良しとしようと考えるきっかけになった経験だった。

多くの事を考え、反芻し続けることができるプロジェクトに参加できて光栄である。